

# ミンダナオの風

執筆編集\*松居友 発行:ミンダナオ子ども図書館



ミンダナオ子ども図書館の出発時から  
日本事務局を

無償のボランティアで一人で支え

ミンダナオ子ども図書館を心から愛し

子どもたちから、「母さん、母さん」と

慕われていた、山田順子さんが亡くなった！

癌だった・・・

この写真は、亡くなる一ヶ月ほど前のもの

すでに車椅子ではあったものの

気丈で明るく

いつも笑顔を絶えさせない

末期癌とは思われない、気力と美しさに満ちた方

「末期癌なら」

ミンダナオ子ども図書館で最後暮らしたい

子どもたちや若者たちに囲まれて・・・

クリスマスには、必ず行きます

そのために今、がんばっている

みんなによく」

12月2日、日本を発つ私に語られた言葉

とつぜん、クリスマス前に知らせが入った  
ミンダナオ子ども図書館の子たちは泣いた

## 基盤作りの10年

松居 友

ミンダナオ子ども図書館は、7年目に入る。ミンダナオに私が足を踏み入れてから、10年になるわけだ。1つの事業の基盤を作るには最低10年かかる。基盤の上に「建物」がしっかりと建つには、さらに10年が必要だ。

そう考えると、これからの3年は、基盤作りの仕上げの時に入ったわけだ。

「建物」が建つのは13年後。現在私は、56歳だから、13年後は69歳。初老を迎える年になる。

初老とは、45歳からの事を言うのだそうだが、こうした仕事をしていると、年をとっていられないから、初老を初めて老人の域に踏み込んだなあ、と感じる時期と解釈するなら、私の初老は70歳？

さらにその後、ミンダナオ子ども図書館が、何らかの「成果」を世に顕すのは、さらに10年。生きていれば80歳になる。

今、ここにいる子たちが、30代から40代になる時期！

亡くなった山田さんなどは、60歳の半ばで、末期癌で車椅子にのりながらも、常に元気で明るく、中年も初老も老後も無く、万年少女のような方だったから、こちらの方は、天使のように年齢を超越していたと言えるだろう。

ミンダナオに足を踏み入れてからの10年間、絶えず「貧困」と「平和」の問題を考え続けてきた。

ミンダナオは、北海道を少し大きくした程度の島なのだが、この小さな領域になんと驚くべき数の国際的な問題が集積している。

資源をめぐる戦闘と紛争。グローバル資本の経済的搾取が原因の貧困、と言った、経済政治問題・・・

多様な民族と言語。先住民民族のアニミズムにイスラム教、キリスト教(カトリックとプロテスタント)が覆い被さった複雑な宗教的問題・・・

美しい熱帯雨林の伐採、その結果起こ



る洪水。大規模プランテーションによる農薬汚染などの環境問題・・・

「こんな小さな島に、世界の諸問題が凝縮している。それにもかかわらず、自然の美しさや人々の心、とりわけ先住民民族の世界観や文化が、驚くほど生き生きと息づいている！何と面白い島だろう！」

10年前、偶然ミンダナオに踏み込んで、この地で人生最後の活動をしよう、と決心したきっかけは、これら諸問題と、それにもかかわらず一生懸命生きている人々、とりわけ子どもたちの姿を見たことだった。



地平まで続くイスラム避難民と子どもたち。貧困の山奥で、自然の精霊崇拝に生きているマノボ族たち。

とりわけ熱帯雨林のチョウチョウやカブトムシのような子どもたちの姿と出会ったことが、ミンダナオで生きてみようと思ったきっかけだった。

この出発時の想いは、ミンダナオに足を踏み込んでから10年たった今も少しも変わらない。それどころか、ますます強くなっていく。

これだけ多くの諸問題を抱え込んでいるミンダナオは、海の彼方の日本人には「どこも住む気にはならない怖い場所」と映るだろう。

日本人だけではない、フィリピン人、とりわけルソン島に住んでいる人々にとって、ミンダナオは、「恐ろしくてとても住む気になれない場所」なのだ。

マニラで、「どこに住んでいるの」と聞かれ、「ミンダナオのコタバト州です」と





答えると、こういう答えが返ってくる。

「エッ、モロ（イスラム教徒の蔑称）と先住民のいるところでしょう、よくあんな所に住めますねえ。しょっちゅう殺し合いが起こっているのに・・・」

先般も、イスラム自治区で57人が惨殺された事件があったばかりで、戒厳令まで布告された。

（この事件に関しては、ミンダナオ子ども図書館のサイト、「ミンダナオ子ども図書館：日記」で論じているので必見。検索「ミンダナオ子ども図書館」）  
マニラの人々にとつて、ミンダナオは、野蛮な未開民族とイスラム教徒の跋扈する辺境の地であり、フィリピンであつてフィリピンではないようなイメージなのだろう。

しかし、ミンダナオしか知らない私にとつては、ミンダナオ以外のフィリピンは外国のような気がするほど、ミンダナオは面白い。そんなに怖いところなのに、どこに曳かれるのかと言うと、そこに住

む人々と彼らが生みだす文化。それを取り巻く自然、特に貧しい地域の子どもたち、若者たちの美しさだ。

そんなに美しい所なのに、なぜ怖いことばかり起っているのか・・・と言った疑問もあろう。

しかし、こうした恐ろしい出来事の背景をよく掘り下げて見つめてみると、そこになんと日本も含めた先進国の利己的な関与が見えてくる。それが、ミンダナオの諸問題の核なのだ。

「先進国が、関心を持ってくれさえしなければ、ここは、本当に美しく平和な島なのに・・・」



この地に降り立った時に思ったこと。

「本来は美しく平和な島なのに、貧困と戦闘が、不幸を増長している。この問題の解決のために、どのような一石を投じることが出来るだろうか。例えばそれが、本当に小石であろうとも・・・」

まあ、そこまで格好良く考えなくとも、ここにいる美しい子どもたちに、未来の夢を提供できれば・・・と思った。そんな想いが、7年前のミンダナオ子ども図書館の発足で、今もその想いは衰えることはない。より強くなっても。

さて、この8年間に実践から経験し、学んできた、ささやかな方図は、



平易な言い方をすれば、とことん個人にこだわることによって地域を変えてゆくと同時に、とことん地域にこだわることによって個人と出会うこと。子どもを核にして、互いに出会い支え合うのは大きな喜び。

どんな困難な所にも、例えば戦闘が起こっている地域であっても、そこに子どもたちがいて、困窮していると思うと、スーッと怖さが消えていく。

今回の里親制度とスカラシップは、とりわけ極貧で戦闘が絶えない地域を重視して選んだ。

貧困と戦闘は紙一重だ。こうした地域は、NPAやMILFといった反政府勢力が活発で、一般の人々はなかなか近寄れないのだが、これだけ長く活動していると、協力者も増えて、現地の様子もわかってくる。

とは言っても危険地域、果たして初老をむかえることが出来るだろうか？



## 読み語り、医療、そして スカラシップで平和を築く

読み語り、医療、スカラシップは、ミンダナオ子ども図書館の基軸をなす活動だが、平和や貧困の問題の解決になるのだろうか。

結論は、30年後に多少であるのかもしれない。つまり、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップで育った子たちが、次々に社会で活躍し始める頃だ。

結局は、子どもや若者たちが未来だから、より良い未来を築くことを考えるならば、子どもたちに期待をかけるしかない。学校教育にも、宗教教育にも、全幅の期待をかけることが出来ないとしたならば、独自の活動を起こすしかないだろう。それが出来るのがNPOだと思える時がある。



単に学校に行かせてあげるスカラシップなら他にもあるが、フィリピンの現実を見れば、公教育だけでは平和を築く事は出来ないことがわかる。フィリピンだけではなく、世界の公教育も同じ？

ミンダナオ子ども図書館の子たちは、宗教や部族の枠を超えて、読み語りや独自の文化祭、平和の祈りといった活動を、自分たちの力で実行し、平和を考え、友情を築く経験をしていく。こうした独自の試みが大事だろう。

選挙のさいに、単に成績優秀な子ではなく、孤児、片親、崩壊家庭の子たちを優先しているのも特徴だが、特定の地域を重視するのも特徴だ。

地域は、不安定と言われるコタバト州



が中心で、奨学生たちは、自分で生きたい学校を選択できるので、基本的には思い思いの場所から学校に通っているが、月一回の総会で顔を合わせる。今年、400名に達するだろう。

キダパワンの本部には、孤児、片親、両親が働きに出て帰れないといった家庭崩壊の子、学校までの距離が遠い、または家から直接学校に通うのが困難な子たちが80名ほど共同生活をしている。

ここから学校に通うのだが、彼らにとってはここが家庭のようなもので、だれも施設だとは思っていない。読み語り、医療、避難民救済に向かって行動するが、若者たちが常に活動の核になる。

私は、NPOとしてのこうした活動形態を、積極外向型と呼んでいる。立派な施設を建てて、そこに地域の子たちを集めると言った施設ではない。

たとえリーダーにならなくても、未来



に平和を築く事が出来る子たちを育てるためには、小さい頃から苦労している子、戦いで避難民になった体験をした子や、貧困で困窮した体験のある子に心から接し、大学まで行かせてあげる方が良く考えて始めたスカラシップだ。

出発時期は、大学生から始めたが、貧しい地域に読み語りに行くようになって、貧困地域の子たちは、小学校すら続けられない事がわかってきた

3食たべられないほど貧しく、学校にお弁当も持っていけない、山岳地域に追われたマノボ族の子たち。

出稼ぎのため、家族でトラックの荷台に乗せられて、遠くの地までサトウキビ刈りに行く、労働に駆り出される小学生たち。学業は、小学校半ばでストップ。

度重なる戦禍で、数年ごとに繰り返し避難民化して学業が続かない子どもたち。こうした小学生たちにとっては、高校入



平和と貧困問題の解決のために始めた、重点地域を選んだ、小学校の里親奨学制度

現地で活動していくとわかるのだが、僻地や山岳部の貧困地域は、大方が反政府感情を強く持っており、いわゆるNP

学は夢のまた夢。大学などは想像外だ。極貧の僻地にすむ子たちにとって、高校は、生活にゆとりのある家族の特権。極貧の子たちは、お弁当も持っていけないので、小学校に登録されたのちに、1、2年生で学業を停止していく。

「ミンダナオ子ども図書館のスカラシップが、極貧の子たちを対象とするならば、小学校のスカラシップから始めなければならぬ。小学校の学費支援だけでは駄目なので、プロジェクト代、文具代、場合によっては炊き出しの米の支援も必要だ・・・」という事が現場体験からわかってきた。

AやMILFといった反政府ゲリラの訓練や活動地域になっている。貧困と戦闘は、表裏一体となった社会問題なのだ。

山岳地域や僻地の学校に行きたくても行けない若者たち。3食たべるのもままならない子たちは、リクルートによって、反政府組織に参加したりする。こうした組織は、独自に奨学制度を持っていたりするし、兵士としての訓練に参加すれば、少なくとも三食たべることは出来るのだが、戦闘で最前線に立たされるのも彼ら

貧困地域には二通りある。都市部の貧困と僻地の貧困。

両者は、まったく異質なわけではない。耕作に適した平地をプランテーションや移民に追われた先住民などの極貧層は、より条件の厳しい山岳地域に住居を移していくが、結局そこでもたべられず、仕事を求めて(と言ってもゴミ拾いや物乞いだが)都市部に流れ込み、貧民街を作って住む。

深夜の屋台で串焼きを食べていると、集まってきたのは小銭をせびる子どもたち。そのほとんどが小学生中退だ。

例えばミンダナオ子ども図書館に着いたなり、泣き出したスイススイス(上の写真)は、深夜まで物乞いをしながら、ストリートチルドレンとなって徘徊して

いた。

「学校に行きたい?」と聞くと「ええ、でも父さんはいないし、お金もないし、母さんは頭がおかしくなっている・・・」



今年度の小学校の里親奨学学生を選考する対象地域は、反政府勢力NPAの活動が活発で、戦闘が絶えない山岳地域から2カ所選んだ。

1. アラカンのマノボ地域
  2. マキララの移民系山岳地域
- さらに戦闘の続くイスラム地域から、ピキットの山岳地域とARMM(イスラム自治区)に属し、MILFの強い2カ所。
3. 湿原沿いのサパカン集落
  4. 山岳沿いのセオマラウ集落
- そして、昼はゴミを拾って、深夜は物乞いでさまよう
5. ストリートチルドレンたち
- こうして選出された子たちの中には、対NPAの戦闘で、父親が国軍に殺され

た子たちもいる。

(実際の活動報告に関しては、サイト参照。検索『ミンダナオ子ども図書館』の『ミンダナオ子ども図書館だより』を参照)

こうした地域から、現地の人々の協力を得て、慎重に家庭調査をしながら選考を進めていったのが、今年度の奨学学生候補たちだ。

皆さん、この子たちが、小学校から、高校を経て大学にまで通えるように支援をよろしくお願いします!

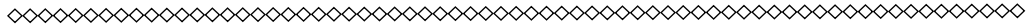
私たちスタッフも独自に、互いの宗教や部族を理解しあうための文化祭や、平和の祈り、シンポジウムを行ったりして、学校にはない、心と感性の教育を進めていきます。

また、彼らが自主的に読み語りや医療活動にボランティアで参加しつつ、胸を張って社会に出ていけるように、スタッフと共に努力をしていきます。



# 日本事務局がさらに充実してスタート

予期していた事とは言え、あまりにも早かった山田順子さんの死は、大きな悲しみでした。  
しかし、順子さんのミンダナオ子ども図書館の子どもたちにそそぐ熱き想い  
つらくとも、いつも笑顔を絶えさせない、前向きな生きる姿勢を思いだしても  
「さあ、いつまでももたもたしていないで、もっと前向きに歩いていっちゃい！  
私も天国で応援しているんだから・・・」という声が、聞こえてきます。



## 順子さんの遺志をついで私たちは、 ミンダナオ子ども図書館の日本事務局を、さらに本格的に立ち上げていきます

### 1、日本事務局長に、ミンダナオでのNGO活動の経験豊かな大瀧みほ子さんを抜擢しました。

すでにHP『ミンダナオ子ども図書館だより』で執筆していただいているので、ご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、大瀧さんは、長くミンダナオのピキット、イスラム地域と関わってこられた方です。ミンダナオへの関心も思い入れも深く、MCLとも活動を共にしてきた関係で、私たちの活動も良く理解しています。

お父さんは、プロテスタントの牧師さん。ご主人は、三鷹の国立天文台の技術者です。思春期の頃から、宗教対立に関心を持ち、立教大学の大学院で論文「紀要 2006年5号 - フィリピン・ミンダナオ紛争におけるNGOの役割●大瀧みほ子 - 立教大学大学院独立研究科 21世紀社会デザイン研究科」を發表。

(サイト検索：「ミンダナオ紛争」で探せます。)

### 2、日本事務局の日本法人化を早急に

繰り返し議題にあがりながらも、山田順子さんのご病気などで、のびのびになっていた、NPO法人化を、大瀧みほ子さん中心にして、早急に進めていきます。

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピンのNPO現地法人ですが、日本での支援者は1500名を超えます。少しずつ人々にも知られるようになり、社会的な役割を考えても、法人化は必然的な流れだと思います。すでに去年、ボードメンバーの選出も終えて、今年こそNPOとして登録させて、日本での新しい活動基盤を確立します。

### 3、支援者への対応も迅速、充実

驚かれる方が多いのですが、今まで日本サイドの仕事は、ほとんど松居友一人で、現地でこなしてきたのです。しかし、お礼の葉書の発送や寄付確認の問い合わせに対する対応が、遅いという批判を免れることは出来ませんでした。

理解のある方は、「現地であれだけの活動をしながら、良くまあ、一人でなさりますねえ。」と同情されたものです。しかし、これからは、日本事務局がMCLの強い見方。支援者への対応も迅速、充実させていきます。

### 4、日本の若者とミンダナオの若者たちの、接点になる事務局を！

時代を見ると、日本の人々がミンダナオの若者たちを支援すると同時に、心の問題、貧しくとも強く明るく生きていく方法など、経済支援は出来なくとも、ミンダナオの若者たちが、日本の若者に、心の支援を開始できる時が来たと思っています。

日本事務局を中心にして、国際交流の輪を広げていきたいと思っています。その点でも、大瀧みほ子さんは適任で頼りになります。旅行業の資格も持ち、旅行会社とも契約。団体の訪問は、現地を知っている彼女を通してお願いします。個人やグループの訪問も、相談してみてください。航空券やホテルの手配もOKです。

### 5、日本事務局の住所や電話が変更！

日本事務局住所：〒207-0022 東京都東大和市桜が丘4-261-1-505

携帯電話：090-8105-3948 メール：japan.mcl@gmail.com (大瀧みほ子)

MCL日本事務局電話・FAX番号：042-511-7246

## 日本事務局を引き継いで

大淵 みほ子

ミンダナオ子ども図書館との出会いは5年前だったと思います。その頃大学院生だった私は、MCLのあるキダパワンからさらに1時間程北上したピキットという場所で、NGOの活動内容について調べたり、子ども達の紛争に対する意識調査などを行っていました。

今もそうですが、そのあたりで活動する日本人というのはそれほど多くはないので、松居さんのことやMCLの活動については自然と耳に入ってきました。

ムスリム・クリスチャン・先住民の子ども達が分け隔てなく同じ場所に住んでいるということに、私は興味を持ちました。なぜなら、私が居たピキットという場所では同じような活動が村単位で当時始まったばかりで、理念の根本が似ているなと思ったからです。

ピキットの活動は「Ginapalatlaka」

(ギナパラダカと発音、略称G7)と呼ばれ、ピキットの中心部にあるカトリック教会のライソン神父という方が先導して、ムスリム・クリスチャン・先住民が住む7つの村を一つの共同体に取りまとめ、フィリピン軍や反政府組織の紛争に侵されない地理的・精神的な「聖域」として

守るよう、フィリピン政府にも反政府組織にも認めさせた場所でした。

現在G7はさらに2つの村が新たに加盟し、その活動の枠が広がるとともに、フィリピン国外にも知られる存在となってきました。

ライソン神父の理念は、かつてミンダナオがそうだったように、民族や宗教を超えて皆が一緒に住むことからまず始めて、お互いの宗教や民族の違いを知り、偏見を捨てて認め合えるようになることから平和を創り出そう、というものです。

皆さんがご存知のように、2001年の9月11日にNYでテロが起こり、ブッシュ大統領はテロとの戦いを開始しまし



た。その当時、宗教はあたかも紛争の要因であるかのように語られました。フィリピン政府も早速同調し、ミンダナオがテロリストの巣窟だと断定した上で、米比合同演習による掃討作戦を開始しました。それが2003年の紛争の要因です。

恐らくライソン神父はそのような世界情勢に拮抗するべく、G7の活動を始めたのではないかと思います。宗教や民族の違いは紛争の要因ではない、本当の紛争の要因は紛争そのもの、つまり紛争を起すことで利益を得ようとする人間の汚い欲望そのものだ、自分の命をかけてでも示したかったのだと思います。

私は同じような理念が松居さんやMCLの活動の中にはあると思っています。少しずつではありますが実際に実を結びはじめ、平和を創る若い担い手が社会に巣立っています。

ミンダナオに平和を創ることは容易ではありません。とても長いスパンで考えなくてはなりません。はがゆく思うこともありますが、気長に活動していくことが大切だと思います。松居さんが言うように20年後に成果が出ていればいいですね。

最後になりましたが、前任の山田順子さんは人間的に素晴らしく尊敬できる方

でした。MCLの子ども達からは「ママジュンコ」と呼ばれ慕われてきました。順子さんは料理がとても上手で、MCLに着くなり日本料理を子どもたちに振舞っていたと聞いています。子ども達はその味が忘れられないようです。

順子さんはママでしたが、私は「アテミホ」(アテとはお姉さんという意味)と呼ばれています。順子さんのようなママの領域には程遠いので、まずはアテの立場から子ども達と接していきたいと思えます。支援者の皆様、どうぞ気長に見守っていただければ幸いです。宜しくお願いたします。



# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、  
お金が無くて学校に行けないときと  
病気になっても病院に行けないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館：支援方法

### 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

専用の振り込み用紙をご請求いただくか、直接下記の振替口座をお願いいたします。  
寄付をいただいた方々には、ミンダナオより年四回季刊誌「ミンダナオの風」（2, 5, 8, 11月）に同封して、若者たちの手描きのお礼の絵葉書をお送りしています。

### 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して、手描きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

### 3、里親支援（小学生）・・・年額24000円（月額2000円）

振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して、手描きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

スカラシップと里親支援は、季刊誌と共に手紙や手書きクリスマスカード、写真、プロフィール、成績表などと共に届きます。文通可能、現地に来られた場合は家までご案内します。

### 4、保育所建設支援・・・30万円（一括振込みでお願いします）

振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して、手書きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

### 5、物資支援：詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

古着や古靴の支援もよろしくお願ひします。

郵便振替口座番号 00100 0 18057  
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

連絡先

#### 日本事務局

日本事務局住所：〒207-0022 東京都東大和市桜が丘4-261-1-505  
携帯電話：090-8105-3948 メール：japan.mcl@gmail.com（大淵みほ子）  
MCL日本事務局電話・FAX番号：042-511-7246

#### 現地事務局

現地携帯：001010-63-(0)9219603640（松居友）日本滞在中：08055023446  
現地オフィスTel:001010-63-(0)64-288-5621  
Eメール：mclstaff@zar.att.ne.jp（松居友）ウェブサイト検索：『ミンダナオ子ども図書館』  
現地住所：Mindanao Children's Library : Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines